

《報告》

螢狩の唄考 4
～螢狩の唄の分類ならびに多様化の要因について～

後藤好正

神奈川県横浜市港北区新羽町 675-202

はじめに

螢狩の唄は動物を歌ったわらべうたの中では最も数が多いと言われ、北原白秋編『日本伝承童謡集成』には400編以上の唄が収録されている。実際には林友男が岐阜県下だけで260曲を採集したように(林, 1991), 日本各地で多彩な唄が数多く歌われていた。これらの唄には共通した詞型によって3ないし4つの形式が認められている(三谷, 1954ほか)。しかし、従来の分類では螢狩の唄の全体像を見るためには簡略にすぎ、歌詞の内容や分布域を考慮して分類する必要がある。本報ではそれらを踏まえて新たに分類試案を提示するとともに、螢狩の唄が多様化した要因について若干の検討を行う。

なお、引用文・掲載歌は旧漢字は常用漢字に改めたが、ホタルの漢字表記は螢で統一した。掲載歌は引用文献の表記を尊重したが、仮名遣いは現代仮名遣いに、大文字で表記されていた撥音・拗音の捨て仮名は小文字に改めた。「螢」に「ほたる」以外の読み仮名が振られていた場合は、振り仮名を表記に用いた。引用歌には採集地の都府県を〔 〕で示した。

また、本報での動物の唄とは本城屋(1982)の定義する「遊戯的口遊唄、動物を対象とする遊びを伴う唄」を示し、動物が歌われていても歌うことを目的としている口遊歌の「兎、兎、なに見て跳ねる、十五夜お月さまをみて跳ねる」などは含まれない。

1. 螢狩の唄の分類

1-1. 従来の螢狩の唄の分類

民俗学者の三谷栄一は論文「螢狩の唄と田の神」の中で、日本各地の螢狩の唄を多数取り上げ、それらを「山見て来い」形式、「昼は草場の露飲んで」形式、「あっちの水はにがいぞ」形式の3つの形式に分けている(三谷, 1954)。三谷はこれらの形式の唄が柳田国男のカタツムリ方言の分布、いわゆる方言圏論と同じ分布を示しているとき、この分布形態が時代性を現すものであるならば、「昼は草葉の」の系統は螢狩唄として現存するものの中、最も古い形を示すものかも知れない。その次に「山伏こい」「山吹こい」の系統が流行し、最後に新進の意気もの凄く侵入してきたのが、「あっちの水はにがいぞ」の形式をもつ唄であったのであろうかと、断定は避けつつも、これら3つの形式の元唄が繰り返し成立し、周縁部へと広がっていったと推定している。

町田嘉章・浅野建二編著『わらべうた』には沖縄の唄を除く次の3曲の螢狩の唄が収録されている。

ホーホー螢こい

ホーホー螢こい、あっちの水は^{にがい}いぞ、こっちの水は^{あま}いぞ

ホーホー螢こい、山路こい、行燈^{あんどん}の光で、又こいこい

〔秋田〕

螢の親父

ホホ 螢 来い、螢の親父は金持で、夜は提灯 高のぼり、
 昼は草葉のお露のみ、ホホ 螢 来い

〔栃木〕

谷川の水

ホホ 螢 かい、谷川の水呉りゆう、谷川の水ア 要らんこんな、
 堀の水 ちい呉りゆう、ホホ 螢 かい

〔佐賀〕

町田・浅野（1962）は注解で、「ホーホー螢かい」の前半部分を「あっちの水」、後半部分を「山路かい」式とし、「螢の親父」は「夜は提灯」系統としている。また「谷川の水」も東京の「柳の下の水のましよ」系統として、「あっちの水」「山路かい」「夜は提灯」「柳の下の水のましよ」の4つの形式を認めている。本書は文庫本で採譜した譜面も掲載されていることから収録できる曲数の制約もあるが、基本的にはこの4つを型と考えていたようである。浅野は1970年に『わらべ唄風土記下』を著したが、基本的には前著『わらべうた』を踏襲し、〈あっちの水型〉〈山道来い型〉を認めながら、掲載歌は混合歌である秋田の唄を用いた。峰村（1984）や工藤（1984）は螢狩の唄は〈あっちの水型〉〈螢の親父型〉に二分されるとし、さらに工藤は「山道来い」とうたうほたるの歌も多い」としながらもこれを1つの型とみなかったのは、浅野の影響によるものではないだろうか。

山本孝哉は『昆虫と自然』3巻6号の「螢うた」の中で、「螢狩りの唄を分類してみると、大きく分けて四つの型（I「あっちの水」型、II「山路かい」型、III「提灯高登り」型、IV「谷川の水呉りゆう」型）に分けられると思う」と述べ（山本，1968）、上記の町田・浅野の分類を踏襲しながら「螢の親父」「夜は提灯」系統は「提灯高登り」型、「柳の下の水のましよ」系統は「谷川の水呉りゆう」型と名付けた。山本は三谷論文を見ているものの、後述する〈宿貸せる型〉と〈螢の食い物型〉の言及には関心を示さなかったようである。

上記はいずれも全国の歌を対象にした分類であるが、特定の県に限定した分類も見られる。酒井（2013）は鳥取県内のうたを1）一般型、2）一般型亜流、3）光に着目したもの、4）その他に分けた。1）一般型は「ほー ほー螢来い、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、ほー ほーほたる来い」という「あっちの水」型の詞章の唄で「全国的に見ても標準型」と述べている。2）一般型亜流はさらに「甘い水を飲みに来い」が続く「甘い水を飲みに来い」系統、「螢来い」の後に「べんべらこ」「ぶんぶくしよ」が続く「べんべらこ」系統に細分している。3）光に着目したものは〈あっちの水型〉が〈小さな提灯型〉と混合した唄、4）その他は同じく〈あっちの水型〉に〈三吉仲人型〉が混合した唄歌である。ただし、鳥取県下でも歌われていた〈山道来い型〉は抜け落ちている。

駒形（1980）は『わらべ歳時記』で新潟県内の唄を、「こちらの水は甘いぞ」系、「夜は提灯高のぼり」系、「三吉仲人嫁にしよう」系の3つの系統に大別できるとしている。本書の掲載歌4編中2編は〈宿貸せる型〉であるが、上記3つの系統とは合致しない。また〈あっちの水型〉が掲載歌に見られないことから、あるいは駒形は〈宿かせる型〉を〈あっちの水型〉に含めて考えていたのかもしれない。さらに、新潟県でも採集されている〈山道来い型〉にも触れられていない。

1-2. 分類基準の検討

三谷の示した3つの形式は、その後も町田・浅野や山本に引き継がれたが、これはその分布形態や伝播を念頭に分けたことを考えれば、当然の措置である。さらに三谷（1954）は「山見て来い」形式の中で「今までに集まった信州の資料で気の附くことは、「行燈の光」を持ち出さないことである。今揚げた⁽⁵⁹⁾三首も「山

吹」とは見えても「行燈の光」とは唄っていない。そして信州から越後にかけては、この地独特のものが発達していたことである」と、また「あっちの水」形式の中で「やはり何か前行の唄のあったように思われる程、北陸地方のみ見える一つの型である」（傍点筆者）と〈宿貸せる型〉〈螢の食い物型〉に気付いていたものの、三谷の論文の主旨が螢狩の唄と田の神信仰の関わりを示すことであるため、これ以上の言及はなされていない。また、駒形（1980）は前述の通り新潟県内の唄を検討し〈三吉仲人型〉を認めた。

武田（1969）は螢狩の唄を三つに大別できるとし、①水や汁で誘う唄、②「柳餅」や「鯨の頭」など食べ物を食わせるという唄、③螢を擬人化した唄に分けた。たしかにこの分類も1つの方法ではある。しかし、この方法では

螢来い乳くれる、山吹来い宿かせる、

おのがてんでの御器もて来い、粥餅三杯かいてくれる

〔長野〕

の唄は①の唄にも②の唄にも分類されてしまう。また、〈鯨の頭型〉のように同じ型の中に①と②の唄が混在する例が生じるし、〈螢の山型〉などいずれにも該当しない型がいくつも生じてしまう。浅野（1970）にしても、〈あっちの水型〉の類歌に飲食物が歌われている〈螢の食い物型〉や〈玉子の水型〉を含めているし、「山伏」や「行燈」「提灯」を歌詞に持つ〈宿貸せる型〉〈螢の嫁取り型〉〈提灯ともして型〉を〈山道来い型〉の類歌としている。同様に尾原（2009）も〈螢の嫁取り型〉の類歌に〈三吉仲人型〉をあげているが、これもともに「嫁取り」「嫁入り」を共通した発想の語句と見たことによる。

山本（1968）が1つの型と認め「谷川の水呉りゅう」型とした〈谷川の水型〉を、町田・浅野（1962）が「柳の下の水のましよ」系統としたのは

ほ一たるこい 柳の下で水のましよ あっちの水はにーがいな こっちの水は甘いな 〔東京〕

の「水のましよ」に注目して、「水呉りゅう」と同想の歌詞を持つと見たことによる。山本（1968）はこの解釈を受け継ぎ、混合歌を含む9編を「谷川の水呉りゅう」型として例示したが、いずれも水やそれに類する物を与えるという歌詞を共通した発想とみている。しかし、これらの歌詞は発想の共通性を持ってはいても、異所的に生じたものとみることができ各唄の類縁性はない。

これまで螢狩の唄の分類については、形式、式、系統、系、型などの語句が使用されているが、その定義は曖昧で、類歌との違いも明確ではなかった。三谷の3つの形式以外は、主に類似の歌詞や語句の有無によってまとめられたものである。螢狩の唄を分類するにあたっては、歌詞や語句の類似性という表現上の類歌ではなく、詞章の構成や共通性、分布形態を含めて検討する必要があると考えられる。このことを踏まえ、次節で新たな分類案を試みてみたい。

1-3. 螢狩の唄の分類試案

本分類試案では、固有の表現形態を持つ詞型を形式と称し、個々の形式の異なる唄の一群の名称に型を用いる。つまり、型は個別に独立して成立した唄または元唄から派生し独自の歌詞を確立した唄で、一定の分布域と特有の共通した詞章を持つ唄の一群となる。また、これらの型は分布形態の違いによって5つに大別した。

(1) 全国的に見られる唄

全国的な広がりを持って歌われていた、またはかつて歌われていたと推定される唄。

① 〈あっちの水型〉

ほうほう 螢こい、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、ほうほう 螢来い 〔全国〕

② 〈山道来い型〉

ほうだる来い 山路来い、行燈の光コ、ちよいと見て来い 〔東北地方〕

③ 〈螢の親父型〉

ほうほう 螢来い、螢の親父は金持で、夜は提灯高のぼり、
 昼間は草葉のお露のみ、ほうほう 螢来い

[関東地方]

〈あっちの水型〉は全国的に歌われており、現在ではほぼこの歌だけとなってしまった感が強い。〈山道来い型〉〈螢の親父型〉はともにほぼ全国的に採集されているが、特に関東～東北地方で多く採集され、西日本での採集例は少ない。

(2) 一定の地域で歌われた唄

複数の県にまたがりまとまった分布域を持つ唄。

① 〈螢の嫁取り型〉(東京多摩地方～神奈川県)

ほたるさんの嫁入りは、油もいらず、お提灯もいらず、
 お尻の光で、ぴっかりぴっかり、飛んでおいで

[神奈川]

② 〈赤い鉢巻型〉(福井県)

ほうしほうしほつたる来い、来い来い来い、螢こという虫は、
 赤い鉢巻ねじあげて、けつに提灯ぶらさげて

[福井]

主たる分布域は福井県内であり、後述する(4)の唄に該当するが、群馬県や静岡県・愛知県でも1例ずつではあるが採集されているためここに含めた。

③ 〈螢の食い物型〉(石川県・福井県・滋賀県)

近ん来い近ん来い、螢この食物は山のやまのどんぐりを、
 一皮剥いてもがりがり、二皮剥いてもがりがり、近ん来い近ん来い

[福井]

④ 〈提灯ともして型〉(九州北部～山口県)

ほうたる来い来いや、来い来いやのお婆さんが、
 お提灯とぼして待ちよるぞ、はあい来にや逃ぐるぞ

[大分]

⑤ 〈三吉仲人型〉(兵庫県播磨地方西部・岡山県・鳥取県)

螢来い、団子しょう、お花よめいり、三吉なこうど、
 一がとっさん、やりかたぎ、やりのさき、すぼんすぼん

[兵庫]

⑥ 〈宿貸せる型〉(長野県を中心にその周辺)

ほたる来い、乳やるに、やまぶし来い、宿かすに

[長野]

⑦ 〈玉子の水型〉(大阪府・兵庫県東南部)

ほうち、来い来い、落ちたら玉子の水飲まそ

[大阪]

⑧ 〈鱧の頭型〉(青森県・秋田県・山形県)

螢こい、鮓の頭の露吸い来い

[山形]

⑨ 〈燕(つばくら)にのまれる型〉(岩手県・宮城県)

ほうたるさんはおいとしや、上さあがれば燕にのまれる、下において露食め

[岩手]

⑩ 〈大唐飯の盛りきり型〉(和歌山県・三重県南牟婁郡・徳島県)

ほうたるさんおいで、天の川の露飲まそ、大唐飯の盛りきり、
 鯛の頭のねじきり、ねじきり

[和歌山]

⑪ 〈谷川の水型〉(佐賀県・福岡県筑後地方・熊本県・大分県)

ほうほう 螢来い、谷川の水くりょう、小柄杓もって来い、汲んでやる

[熊本]

※ この型についての山本(1968)の扱いには否定的だが、その分布域や詞章の共通性を認めると一つの形式と考えられる。

⑫ 〈螢の山型〉(熊本県球磨地方・鹿児島県・宮崎県)

ほたるこ、ほたるこ、螢の山から火垂りて来うよ

[鹿児島]

(3) 伝承地が点在する唄

① 〈笹を振ったら型〉

螢来い、飛んで来い、団扇を上げたら飛んで来い、
 笹を振ったら飛んで来い、来たら大事にしてあげよ [群馬]

※ 群馬県、福井県から記録されている。大阪府からは「団扇を…」が、山口県からは「来たら…」が欠落した形の唄が採集されている。また、熊本県では「笹を～来い」の部分のみが〈あっちの水型〉と混合した唄となっている。

② 〈小さな提灯型〉

ほうほう、螢来い、小さな提灯さげてこい、
 星の数ほど飛んで来い、ほうほう、螢来い [千葉]

※ 千葉県・静岡県・愛知県から記録されて、秋田県・千葉県からは「あっちの水」型との混合歌が採集されている。「小さな提灯…」だけの唄が長野県から、さらに混合歌も青森県〈山道来い型+〉・鳥取県〈あっちの水型+〉で記録されているが、これらの唄の歌詞「小さな提灯…」は同想による異所的な発生の可能性もある。

(4) 限定された地域で歌われた唄

分布域が1都府県に収まっているが、類歌が複数確認されている唄

(5) その他の唄

単独で知られるか、または分布域が極めて狭く類歌が限られている、(1)・(2)の型式と類縁関係の認められない地域固有性の高い唄。

(4)と(5)については地域性が強い唄なので、次報で改めて触れる。

2. 螢狩の唄の伝播と変遷

三谷 (1954) は「民謡や童謡が、旅をしていく場合、その土地にある土着して行われているものと並行して歌われるか、混合してしまうか、土着のものを駆逐するか、あるいは駆逐されるかの戦が行われるのは常である。土着のものが衰えて、新しい出現を待っている時は、容易に土着のものを駆逐し、その土地に君臨することができよう。一方がまだなかなか勢力強く、侵入のものと土着のものとの勢力が頷頷している場合は、ここに並立が見られ、それも時代を経れば一方が優勢となり、混合か駆逐が両者の間に行われることもあり得るだろう」と口頭伝承歌の伝播と変遷について整理している。

①並行する例としては、山中笑の『山の手童謡』の東京山の手唄がある(山中, 1919)。山中は四谷(東京都新宿区)で暮らしていた旧幕臣で、幕末の幼少期(文久頃)に歌っていたと推定される唄が記録されている。螢狩の唄は次の2編で、ひとつは〈あっち水型〉の

ほーたるこい、柳の下で水のましよ、あっちの水はに一がいな、こっちの水は甘いな
 もう一つは〈山道来い型〉の

ほーたるこい、山見てこい、あんどの光りをチョト見てこい
 である。

また、三谷は宮城県名取郡岩沼町(現岩沼市)で

○ほたるさんさがらんせ、お山のぶくぶく高提燈
 ○ほたるこい山吹こい、あっちの水はにいがいぞ、こっちの水は甘いぞ
 の〈螢の親父型〉と〈山道来い型+あっちの水型〉がならんで歌われていたことを記している。

②駆逐したあるいはされたという例は記録されることは少なく、事例としては多くない、三谷 (1954) によると、静岡県田方郡函南村 (現函南町) では 1870 年頃は

ほうたるこいこい、玉虫もこいこい、阿弥陀の光で皆舞ってこいこい
 と歌っていたが、その 20～30 年後には

ほーほーほたるこい、あっちの水あにがいで、こっちの水はあうまいぞ
 に置き換り、茨城県那珂郡額田村 (現那珂市) で 1920 年代半ばに歌っていた

ほたるこい山みて来い、ほたるの親父は金持で、夜は提灯たかのぼり、昼は草葉の露すい
 には、1950 年頃には

ほーほーほたるこい、ほたるの親父は金持で、金箱ただいですとんとんと
 と、〈山道来い型+螢の親父型〉から同じ〈螢の親父型〉の後半の歌詞が異なる唄が歌われていたという。

山本 (1968) は「東京ではⅡの「山路こい」型とⅠの「あっちの水」型の二例が見られる。私の知っている明治生まれの東京育ちの人の話によると、その人の子どもの頃は、「山路こい」型が唄われ、「あっちの水」型の唄は知らなかったが、かなり後になってから知ったといわれている。ところが昭和初期の頃育った人の話ではもはや「山路こい」型の唄は知らず、「あっちの水」型の唄しか知らないとのことである」と述べていて、三谷 (1954) の記述などからも東京では元々「山道来い」型が唄われ、その後「あっちの水」型に置き換わったと見てよいだろう。

また、岩手県遠野地方のわらべうたの伝承者、阿部ヤエ (昭和 9 年 (1934) 生) は幼少時に

ほうほうほうたる来お、そっちの水はにがいで、
 こっちの水は甘いぞ、ほうほうほうたる来お

と歌っていたが、氏がわらべうたを伝承された“つつ婆”から教わった昔の唄は

ほうたるさんおいとしゃ、よんまはぼんぼこ高提燈、
 昼間は草葉の露の蔭、ほうほうほうたる来お

で (阿部, 2000)、およそ数十年の間に唄が置き換わったと考えられる。

③混合した例は文献に多くの該当歌があるが、そのほとんどは〈あっちの水型〉との混合である。以下、若干の例歌を示す。

◇ 〈山道来い型+螢の親父型〉の混合歌

ほほほたる来い、やまぶき来い、あんだの光で飛んでこい、
 夜は提灯たかのぼり、昼は草葉の露吸って、ほたるなんかいいこった [茨城・群馬]

◇ 〈螢の親父型+あっちの水型〉の混合歌

ほうほう螢こい、螢のおやじは馬鹿おやじ、夜は提灯たかのぼり、
 昼間は草葉の露のみだ、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ [茨城]

◇ 〈山道来い型+あっちの水型〉の混合歌

ほうたる来い山路来い、行燈あんどんの光をちょいと見て来い、
 あっちの水あにんげあぞ、こっちの水あ甘こいぞ [宮城]

◇ 〈あっちの水型+螢の嫁取り型〉の混合歌

ほうほう螢来い、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、
 ほうほう 螢来い、おしりの光で飛んで来い、
 螢どんの嫁入りはお提燈たいまつもいらす、松火たいまつもいらす、おしりの光で飛んで来い [神奈川]

- ◇ 〈あっちの水型+螢の食い物型〉の混合歌
 ほうしほいほいほい、螢このたむしこ、
 あっちの水はにがいぞ、こっちの水は甘いぞ、
 ほうしほいほいほい、螢この食いものは山の山の団栗、
 一皮むいてもがりがり、二皮むいてもがりがり [福井]
- ◇ 〈あっちの水型+玉子の水型〉の混合歌
 ほうほう螢こい、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、
 落ちたら玉子の水のまそ [大阪・兵庫]
- ◇ 〈あっちの水型+三吉仲人型〉の混合歌
 ほほほたる来い、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、
 お玉嫁入り 三吉仲人、うちの父つあん槍かたぎ、槍の先ですってんとん [兵庫]
- ◇ 〈提灯ともして+あっちの水型〉の混合歌
 ほっほっ螢来い、来い来い山の爺さんが、提灯ともして待ちよるぞ、
 あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ [大分]

東北地方ではなかなか元唄の勢が強かったのか複数の型の混合歌が見られる。

- ◇ 〈螢の親父型+山道来い型+燕にのまれる型〉の混合歌
 ほうだるさんほうだるさん、昼まは草葉の露飲んで、夜はびっかり高提灯、
 ほうだる来いやまみち来い、行燈の光をちょいと見て来い、
 ほうだる来いほうだる来い、天上さ上がって下さくだって、煙草畠の露あがせえ [宮城]
- ◇ 〈山道来い型+あっちの水型+燕にのまれる型〉の混合歌
 ほうほうほうたるさん、山路来い、
 あっちの水苦いぞ、こっちの水甘いぞ、
 天竺のぼりしたらば、つんばくらに呑まれべ、下ささがって露コのみ [岩手]

さらには〈あっちの水型〉〈螢の親父型〉〈燕に飲まれる型〉〈山道来い型〉の4つの形式が混合した岩手県水沢市（現奥州市）の次の唄まで現れた。

ほほほだるこい、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、ほほほだるこい、
 ほほほだるこい、ほだるのお父さん金持ちだ、道理でお尻がピカピカだ、ほほほだるこい、
 ほほほだるこい、昼間は草葉の露のかげ、夜はポンポン高提灯、
 天竺上がりしたなら、つんばくらにさらわれべ、
 ほほほだるこい、山道こい行燈の光をちょっと見てこい

このような唄の伝播から並立を経て置換または混合へと到る経緯は、町や村、集落などによってさまざまであった。

本城屋勝の『わらべうた研究ノート』には、氏が採集した秋田県阿仁地方（北秋田市）の螢狩の唄が8編掲載されている（本城屋，1982）。このうち3編が〈あっちの水型+山道来い型〉の混合歌、2編は〈あっちの水型〉、1編は〈あっちの水型+小さな提灯型〉の混合歌で、残りの2編は〈あっちの水型〉の変形歌である。採集地は李岱・比立内・上杉・浦田・前田・米内沢・湯の岱・萱草とそれぞれ異なり、従来から歌われていた唄が駆逐され置き換わった地域がある一方で、駆逐されることなく混合されて歌われている地域もあり、同じ詞章の歌も地域によって微妙に歌詞が変わっている。このことは、阿仁地方は〈あっちの水型〉の歌が伝わっても、その受容は地域ごとに異なり、地域毎に見れば三谷の示したような唄の置換や混合が起こったが、阿仁地方全体としてみれば異なった歌がモザイク状に残ることになった。また、〈山

道来い型) から〈あっちの水型) へ入れ替わった東京の区部でも、実際には文京区本郷では〈山道来い型) がそのまま残り、千代田区猿蓑町では〈あっちの水型+山道来い型) の混合歌となるなど一様ではなかった。こうした現象はおそらく日本全国で起きていたと考えられ、『三戸郡誌』(三戸郡教育会, 1927) にも地域毎に異なった唄が 14 編が掲載されているが、採集された時代を反映して置換だけでなく並立した状況も見られる。

3. 螢狩の唄の多様性の要因

わらべうたは口頭伝承という性質上、歌詞や曲調に地域差や時代差が生じ、多様な唄が生み出されているものであるが、螢狩の唄がなぜここまで多様化したのか、その要因について考えてみたい。

(1) 螢狩りの唄の形式の多様性

螢狩の唄が多様である最大の要因は、分類試案で示したような多くの形式の唄が生み出されたことがあげられる。動物の唄を見渡しても、ここまで多くの詞型が生じた動物の唄は見当たらない。

螢狩の唄はホタルを捕りたい子供達が、近くに寄ってきて欲しいという願いから生まれた誘い歌であり、[ホタル(動物名)+来い(命令)] が根本的な部分である(後藤, 2018)。したがって、この基本部分に続けて歌われる歌詞は自由に創造・改変できる余地をもっていた。とはいえ、他の動物の唄に較べて螢狩の唄でこれだけ多くの形式の唄がなぜ生じたのかの説明をつけることは難しい。ただ、これらの異なる詞型が子供達からのみ自然発生的に生み出されたものとは思えず、大人の手によるものも少なくなかったのではないだろうか。

こうして創作されたさまざまな形式の唄は、主に〈あっちの水型) が伝播してくる際に、混合歌が生じ多様化していった。ただし、新たに進出してくる唄は異なった形式の唄ばかりとは限らず、同じ型で歌詞の異なる場合もあろう。神奈川県綾瀬市深谷地区で採集された唄は次の 4 編である(綾瀬市秘書課市史編集係, 1994)。

- 1) ほほ螢こい、あっちの水はにがいぞ、こっちの水はあまいぞ、ほほ螢こい
- 2) ほほ螢こい螢こい、そっちの水はからいぞ、こっちの水はあまいぞ、ほほ螢こい
- 3) 螢こい螢こい、あっちの水はにがいぞ、こっちの水はあまいぞ
- 4) 螢こいこい、ちよこいこい、あっちの水はあまいぞ、
こっちの水はにがいぞ、ちよこいこい、ちよこいこい

いずれも混合歌ではないので、江戸時代末期以降に侵入した〈あっちの水型) に置き換わった唄である。このうち 1～3 は共通の元唄が侵入・置換した後に伝承者によって歌詞が変化したと考えられるが、4 の唄は「ちよこいこいこい」という歌詞から元唄の流入後に新たに周辺から伝わった可能性が高い。

(2) 意図せず起こった語句の転化

多様化の要因には、わらべうた一般に見られる語句の変化や歌詞の脱落あるいは追加がある。

本城屋(1982)は、わらべうたについて、「口承文芸は、まず誰かが歌い、それを多数の人が次から次へとまねるものであるため、伝承するうち、旋律もことばも変っていく。わらべうたの場合もそのとうりである。しかし、その変り方には、民謡とわらべうたでは格段の差がある。民謡のように、元歌を意図的に替えて歌うのではなく、元歌をまちがえて歌うのである。(中略)民謡はパロディーであるが、わらべうたはマーマー(わけのわからないひとりごと)である」と述べている。確かにわらべうたの担い手は子供達のため、聞き間違いあるいは憶え間違いによって歌詞が変わることはあるが、螢狩の唄を見渡すと単純に

元歌を間違えて歌ったと思われる例はさほど多くない。そうした例としては、「田の虫」が「たのもし」〔奈良・愛媛〕、「食まちよ」が「甘ちよ（甘いよの意）」〔山形〕、「乳くれず」が「ちちよくれず」〔長野〕への転化などがある。兵庫県の「山から～転んで来い」が「屋根のむねから転んで来い」に転化したのもこの例と考えられるが、途中にもう一段「山の峰から転んで来い」という唄が間にあったのではないかと思う。

また、歌詞の意味の理解不足から、自分なりに納得できる言葉へ言い替えたと考えられる例もある。

神奈川県「ちよこいこい」の歌詞は、県央地区から湘南地区にかけて記録されているが、この歌詞は周辺の唄から推定すると元は「ちよこいこい」であったと考えられる。藤沢市や平塚市の唄には「千代」という漢字が当てられているが（斎藤，1981；大野誌編集委員会，1958），これは伝承者が人名と解釈していたことによるのだろう。

〈山道来い型〉や〈宿貸せる型〉の「山伏」あるいは「山吹」は、「山虫」「山鳩」「山鳥」「山彦」「山姥」「山太郎」「山法師」などに変化している。「山伏」は三谷（1958）が螢狩の唄と田の神信仰との関係を推定する根拠のひとつとして注目した語句だが、唄の歌詞に唐突に現れる「山伏」の意味が分からず、子供達なりに納得できる語句に替えたためと考えられる（後藤，2021）。他にも、和歌山県・徳島県の「大唐飯の盛りきり」が転訛した「太鼓飯」「大根飯」なども同様の例だろう。

さらに、新たに持ち込まれた唄の歌詞の意味が理解できていたとしても、子供達は方言などの日常的に自分達が使っている言葉やより歌いやすい言葉へと言い替えて歌うことは自然なことである。「行燈」が「あんど」へ転訛した例は広い範囲で生じているが、「あんど」はさらに音の近い「阿弥陀」を意味する「あんだ」に転訛し、高知県では「はんど（水瓶）」へと転訛している。

こうした歌詞の変化は子供達が特に意図した訳ではなく、無意識下で生じたものであった。

(3)意図的な語句の改変

しかし、多くの類似した語句の違いは元唄を子供達が意図的に替えて歌ったものである。たとえば〈あっちの水型〉の「苦い」に対する「からい」や「しょっぱい」「まずい」等の言葉は間違っただけとは言えず、そこに関しては本城屋の見解とは立場を異にする。ここでは、時代的变化に伴って改変していったと推定できる事例をあげてみる。

福井県では〈赤い鉢巻型〉の唄が歌われていたが（1-2 参照）、同じ福井県下からは

螢こという虫は、頭に赤帽子かぶって、尻に提灯下げて、螢来い来い、螢来い来い
という類歌が採集されている。この唄の中にある「赤帽子」は「赤い鉢巻」が歌い替えられたものである。日本で本格的に帽子が被られるようになったのは、西洋文化の導入された明治以降のことであるから、この語句の転化も明治～昭和初期の間のことである。

また、鳥取県湯梨浜町原の

螢来い、山道来い、ランプの光で、みんな来い
は〈山道来い型〉の「行燈の光で」あるいは「阿弥陀の光で」と歌われていた歌詞が変化したものであるが、これも明治以降に屋内の照明が行燈からランプに変わっていくのに伴って替えられた語句である。

ほーほーほたるこい、あっちのみーざ苦いぞ、

こっちのみーざ甘いぞ、カンガラもてこいブウ飲ましよ

は島根県江津市の〈あっちの水型〉の唄で、歌詞の中の「カンガラ」は「缶から」、つまり缶詰などの空き缶のことである。類歌は三隅町（現浜田市）・桜江町（現江津市）でも歌われていたが、同じ三隅町では「貝殻」とも歌っていたので、「貝殻」が「かんがら」へ変化したと考えられる。日本で缶詰が初めて製造されたのは明治4年（1871）とされるが、一般に普及するのは1923年の関東大震災以降という。また、日本で缶蹴りが行われ始めたのは昭和の初期頃といい、この頃遊びに空き缶の使用が可能になったことを考えると、

「カンガラ」への改変もこの時期だったのだろう。

動物の唄の対象となる生き物の多くが子供の遊び相手であったのと違い、ホタルは名所図会や浮世絵に描かれているように、子供だけでなく大人も楽しむ昆虫であった。螢狩の唄が他の動物の唄よりも多様な唄が生まれたのは、子供から大人まで男女の別なくホタルに対して向けられた関心の高さにあるのかも知れない。

なお、螢狩の唄の資料では、歌詞のみが採集されたものが圧倒的だが、曲譜資料からも曲調は歌によって違いがあり、音楽的にも多様化していることを付記しておく。

4. 由来が特殊な唄

螢狩の唄の中には、その由来が特殊な唄が知られているが、それらについて見てみたい。

1) 他の目的で歌われるわらべうたの転用

螢狩の唄ではコウモリやトンボで共通した歌詞が使われていることがあるが（後藤、2018）、まったく違う目的で歌われていたわらべうたが螢狩の唄に転用された例が高知県の次の唄である。

向こう山でちらと光るは月か星か螢か、お月さんなら拝みましょうが、螢さんなら手に取る、手に取るこの「あの山で光るものは」は、田植唄、麦打ち唄、盆々唄、子守唄（寝かせ唄）などで歌われ、遊戯唄としては多く手毬唄として歌われている。ここでは一応手毬歌の転用としたが、あるいは田植唄などの労作唄からの転用かも知れない。

ホタルを捕るという行為を表す「螢さんなら手に取る」の歌詞を持つため螢狩の唄に転用されたと考えられるが、本来の誘うための呼びかけ唄の形となっていないためかこれ以外に例がみられない。

反対に螢狩の唄が子守唄として歌われていた例も、神奈川県綾瀬市小園地区や広島県高田郡向原地区（現安芸高田市）で知られている。

なお、従来知られている螢狩の唄とは趣を異にしており、他のわらべうたあるいは民謡からの転用・改作ではないかと考えられる唄を次に挙げておく。

さてもやさしい螢の虫よ、国は何処と尋ねたら、はいはい私でございます、私は江州石山で石山寺で石山寺の門前で、小柳葉ぐろを宿として、七つ下れば化粧して、黄金の鉢巻ヂンとしめ、ばらばら提灯腰につけ、いとしい殿の道照らす

宮本（1936）が“螢取りの唄”といして和歌山県海草郡から記録した唄で、歌詞の調子から元唄は手毬唄または民謡ではないかと思われる。大阪市平野区喜連で採集されている

ほほほたるさん、御前の生まれはどこやいな、私は紀州の草の中、昼は柳で顔かくす、夜はポッポッと火点す

は、4・5節は〈螢の親父型〉の歌詞の変形のようなのであるが、2・3節は海草郡の唄の2・4節に歌詞が似ており、両者には関連がありそうである。

2) 沖縄の螢狩の唄の流入

じんじん じんじん、酒屋の水くって、おちろよ じんじん、さがれよ じんじん

じんじん じんじん、壺屋の水のんで、おちろよ じんじん、さがれよ じんじん

福井県松岡町（現永平寺町）吉野境で採集された唄である。歌詞・曲調ともに沖縄の代表的な螢狩の唄に似ている。「じんじん」は沖縄でのホタルの幼児語で、少なくとも本土ではこのような方言は知られてい

ない。沖縄から伝わったのであろうが、望月（1988）も「伝播の証左や経路が明らかでない」としている。

沖縄の螢狩の唄というまったく異なった系統の唄が伝わった例とは単純に比較はできないが、石川県金沢市で採集された

ほたる来い来い、黄金の虫や、光隠すは銀杏虫や（※ 銀杏虫はカナブンのこと）

が〈あっちの水型〉と混合した形で遠く福島県三春町からも記録されている。こうした例は〈笹を振ったら型〉〈小さな提灯型〉の「伝承地が点在する形式の唄」が該当し、〈螢の嫁取り型〉〈赤い鉢巻型〉〈三吉仲人型〉〈王子の水型〉でも知られていて、水平に広がっていただけではないわらべうたの伝播の不思議さを思わせる。

3) 童謡からの転用

ほほほたるしのぼたる、昼間はあかいまめずきん、日暮はピカピカ まめだかま、

一のお宮で火をもろて、二の宮田んぼへ火とぼしに、三の鳥居は藪の中、

四の宮くぐればくじなぼり、くじながなきだしゃ雨が降る、はよはよおもどり夜がふける

愛媛県宇和町（現西予市宇和町）から採集された、従来知られている螢狩の唄とは曲調も内容も大きくことなる唄である。岩井（1982）は「（北原）白秋が子守唄のフシでうたったという自作の童謡「篠螢」が、一部歌詞が変化してうたいがれたものと思われる」と解説している。元唄と考えられる「篠螢」は、「ほうほう 螢」として大正 8 年（1919）に刊行された白秋の第一童謡集『とんぼの眼玉』に収録され、白秋の童謡詩に数多く曲を付けた弘田龍太郎が大正 10 年（1921）に曲を付けている。この唄のように近代以降の創作童謡が転用された例は、動物の唄を見渡しても珍しい例であろう。

おわりに

本報では螢狩の唄の従来の分類を検討し、新たな基準を示した。また、唄の伝承地域の分布から (1) 全国的に歌われていた唄、歌われていた唄、(3) 伝承地が点在していた唄、(4) 限定された地域で歌われていた唄、(5) 前 4 つの形式とは類縁関係が認められず、極めて狭い地域で歌われたその他の唄に分けた。さらに 1)～3) の形式の唄を詞型の共通性から 17 の型に分類した。

続いて螢狩の唄の伝播と変遷、多様化した要因について検討した。

本報で示した分類試案はあくまでも暫定的なものであり、今後も検討を続ける必要がある。なお、個々の形式の歌については今後詳述するつもりである。

文 献

阿部ヤエ（2000）呼びかけの唄－遠野のわらべ唄の語り伝え 2－。エイデル研究所。

浅野建二（1970）わらべ唄風土記 下。塙書房（塙新書）。

綾瀬市秘書課市史編集係編（1994）綾瀬市民俗調査報告書 3－深谷の民俗－。綾瀬市。

綾瀬市秘書課市史編集係編（1997）綾瀬市民俗調査報告書 6－小園の民俗－。綾瀬市。

後藤好正（2018）螢狩の唄考 2～螢狩の唄の起源について～。豊田ホテルの里ミュージアム研究報告書,(10): 107-122。

後藤好正（2021）螢狩の唄考 3～螢狩の唄と田の神について～。豊田ホテルの里ミュージアム研究報告書,(13): 85-98。

長谷川栄治（1987）兵庫のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 18 上。柳原書店。

服部勇次（1981）愛知のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 12。柳原書店。

- 林 友男 (1991) 岐阜県のわらべうたいまむかし. 私家版.
- 東成郡誌 (1922) 大阪府東成郡役所編・刊. (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 本城屋勝 (1982) わらべうた研究ノート. 無明舎出版.
- 堀場宗泰 (1983) 静岡のわらべ歌 (山梨 静岡のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 11 所収). 柳原書店.
- 伊藤祐忠 (1943) 越前地方の童唄. 福井郷土研究会. (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 岩井正浩 (1982) 愛媛のわらべ歌 (愛媛 香川のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 21 所収). 柳原書店.
- 懸田弘訓 (1991) 福島のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 4 下. 柳原書店.
- 北原白秋編 (1974) 日本伝承童謡集成第 2 巻 天体気象・動植物篇 [改訂新版]. 三省堂.
- 小林暉治 (1986) 石川のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 10 上. 柳原書店.
- 駒形 颯 (1980) わらべ歳時記 ― 越後と佐渡 ―. 野島出版.
- 工藤健一 (1984) 青森のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 2 上. 柳原書店.
- 倉田正邦編 (1955) 三重県民謡集 わらべ唄. 三重県民謡研究所. (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 町田嘉章・浅野建二編 (1962) わらべうた 日本の伝承童謡. 岩波書店 (岩波文庫).
- 町田 等 (1981) 長野のわらべ歌 (長野 岐阜のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 13 所収). 柳原書店.
- 松山義雄 (1972) 山国のわらべうた. 信濃路.
- 宮本国子編 (1936) 和歌山県俚謡集 郷土研究第二輯. 和歌山県女子師範学校・和歌山県立日方高等女学校
郷土研究室. (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 長野県南安曇郡編 (1923) 南安曇郡誌. 南安曇郡教育会. (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 峰村辰典 (1984) 新潟のわらべ歌 日本のわらべ歌 9 下. 柳原書店.
- 三谷栄一 (1954) 螢狩の唄と田の神. 日本民俗学, 2(1): 25-53. 日本民俗学会.
- 望月敏明 (1988) 福井のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 10 下. 柳原書店.
- 尾原昭夫 (1979) 東京のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 7. 柳原書店.
- 尾原昭夫 (1984) 千葉のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 6 下. 柳原書店.
- 尾原昭夫編著 (2009) 日本のわらべうた 歳事・季節歌編. 文元社.
- 大野誌編集委員会編 (1958) 大野誌. 平塚市教育委員会.
- 斎藤紀子 (1981) 神奈川のわらべ歌 (埼玉 神奈川のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 8 所収). 柳原書店.
- 酒井董美 (1982) 石見のわらべうた. 山陰民俗学会.
- 酒井董美 (2013) 山陰のわらべ歌・民話文化論. 三弥井書店.
- 三戸郡教育会編 (1927) 三戸郡誌第 4 歌謡篇. 三戸郡教育会.
- 佐々木昭元・佐藤金男 (1981) 秋田のわらべ歌 (秋田 山形のわらべ歌 日本わらべ歌全集 3 所収). 柳原書店.
- 武田 正 (1969) わらべ唄歳時記 民俗民芸双書 38. 岩崎美術社.
- 友久武文・原田宏司 (1984) 広島県のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 19 上. 柳原書店.
- 山本孝哉 (1968) 蛍うた. 昆虫と自然, 3(6): 18-20. ニュー・サイエンス社.
- 山中 笑 (1919) 山の手の童謡. 武蔵野, 2(2): 60-62. 武蔵野文化協会. (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 柳井市史編纂委員会編 (1988) 柳井市史 総論編. 柳井市.